

## アメリカで育てる

永住や長期滞在の子どもの教育のために

INFOE（海外子女教育情報センター）  
松本輝彦

## 第 16 回

## なぜ、アメリカの大学へ？

## -- 進学の実例紹介 --

アメリカでバイリンガルに育てられた高校生は、日本とアメリカの大学への進学のチョイスがあります。彼らの多くは、本人の夢と希望・家庭の事情や理由などで、「悩みぬいて」アメリカの大学に進学しています。私が直接指導やカウンセリングをした高校生の実例をあげて、彼らの「悩みと迷い」を紹介しましょう。

## E 君：スポーツを続けるために

E 君は、高校で始めた大好きな水泳が続けられて、奨学金も貰えたので、アメリカの大学に進学しました。

彼のお父さんは日本の商社勤務で、彼は小学生時代をほとんど、アジアの国の日本人学校で過ごしました。その後日本に帰国し、中学校 3 年生の時に、今度はアメリカに赴任となりました。そこで、彼は 9 年生として現地の高校に編入しました。その時、クラブ活動で水泳を始めました。

10 年生が終わった時、「父母は日本の大学、本人はアメリカの大学」と希望が分かれました。とりあえずは、「日米どちらの大学にも進学出来るように」と地元の日本人高校生対象の進学塾で国語・社会と SAT のクラスを週末に取り始めました。

しかし、11 年生も終りに近づいた時、突然、父親の日本帰任が決まりました。家族でさんざん悩んだ結果、B 君と妹の学校のことを考えて、とりあえず B 君の高校卒業まではと、お父さん一人日本へ帰る「逆単身」をすることになりました。

そして、12 年生も始まり、日米の大学選びで悩んでいる時に、現地校の水泳のコーチから「奨学金付きで UC に進まないか」という話が飛び込んできました。彼自身は、水泳の練習や試合でのチームメートとの深い付き合いが幸いして、アメリカの学校生活に非常に良く馴染んでいました。その精でしょうか、英語の習得が早く、高校では優秀な成績を収めていました。また、水泳でも恵まれた体力とまじめな努力を重ねて優秀な戦績を残していました。

既に日本に帰国しているお父さんは日本の大学進学を強く希望しましたが、本人の「奨学金付きで、水泳を続けられるアメリカの大学」との希望に押し切られました。UC を第一希望として出願し、その中のトップレベルの大学に無事合格。奨学金ももらえることになり、進学することが出来ました。

しかし、大変だったのは、入学してからです。アメリカの大学では、成績（GPA）が基準以下になるとスポーツを続け

ることが出来ません。さらに、奨学金も打ち切りになります。そのため、E 君は、学期中は毎日朝 5 時起きの日課練習と午後の練習を続けながら、他の学生と同じように授業に出席し、学業を続けなければならませんでした。

本人の言う「集中した勉強と練習」のおかげで、学業・水泳共に、サバイバルすることが出来ました。特に、水泳ではオリンピックの日本代表選考会に出場するまで実力を上げました。残念ながら彼自身はそのオリンピックに出場できませんでしたが、彼のチームメートはアメリカにメダルを持ち帰りました。

大学卒業後は、就職か大学院進学が控えています。彼は就職希望ですが、とりあえず大学を確実に卒業することにしました。卒業後の 1・2 年の遅れは覚悟して、他のアメリカ人学生同様、在学中は積極的な就職活動はしませんでした。

卒業後、日本の就職の状況などを知るために、日本へ一時帰国して、友人の就職活動を見学していました。「良い経験になるし、未だ間に合うよ」との友人の勧めで、ある商社の入社試験を受けてみたところ、書類審査と 1 次・2 次面接をスイスイと合格。最終面接では「がんばってください」と励まされて、「内定」の連絡を待つばかりでした。しかし、E 君の父親の勤務に関するその商社の内部規定により、結局「不合格」となってしまいました。

残念ですが、仕方ありません。ショックが大きかったのですが、日本での仕事探しは止めて、アメリカに帰り職探しを始めました。幸い、アメリカ進出を目指す会社にアメリカ勤務として就職することが出来、今では元気に働いています。

後日談です。商社勤めのお父さんは、その後再度アメリカ駐在となりました。ところが、アメリカの大学を卒業した妹さんはアメリカ定住を決め、お母さんと一緒にカリフォルニアに住んでいます。そのため、お父さんは「単身赴任」で他の州で働くことになりました。現在は、4 人家族が全米で 3 ヲ所に分かれ、生活しています。